



修士論文研究ノート 「痛み」概念の使用における私的感覚の役割について

著者	長橋 光
雑誌名	筑波哲学
号	21
ページ	34-37
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00121539

「痛み」概念の使用における私的感覚の役割について

長橋 光

序

- 1 『探究』の読みに関する予備的考察
 - 1.1 『探究』における「痛み」の考察
 - 1.2 『探究』の確固たる読み
- 2 私的言語、私的体験と痛み
 - 2.1 体験の私秘性と日常の言語
 - 2.2 ウィトゲンシュタインのカブトムシ——痛み
 - 2.3 私的言語
 - 2.4 私的体験とパラドクス
 - 2.5 私的体験の「現実性」
- 3 結語

ウィトゲンシュタインの『哲学探究』（以後『探究』）のうち、特に私的言語論 the private language argument はその出版以来現在に至るまで 60 年近い間問題になってきた。243 節から始まるその議論は、原理的に私秘的な言語は可能であるか、という問いを巡って展開する。すなわち、「話者のみが知りうること、つまり彼の直接的で私的な感覚、を指し示」し、「それゆえ、他人はこの言語を理解することができない」（『探究』243 節 b）ような言語が可能であるか、という問いである。ウィトゲンシュタインはこの問いに対して否定的な回答をしたとするのが通説である。しかしもし仮に「私的言語は不可能である」という結論を受け入れたならば、そのとき我々の感覚のうちには原理的に語ることでできない何かが存在する、ということになるのだろうか。この帰結では、その「何か」とは私的体験、感覚そのものであり、一見すると「感覚」や「体験」にとって本質的なものが、我々の言語から抜

け落ちている、という結論のように見えてしまう。例えば私が歯医者へ行き、「右の奥歯が痛い」と言うとき、確かに医者は私の発話を理解し処置を施してくれるが、彼女は私の意識に現れる痛みを直接に知るわけではなく、間接的に知るのであり、「我慢できない鋭い痛み」などと表現を変えてみても、私の私的体験は最後まで伝達しえないものとして残る、ということになるのだろうか。

私的言語論は、我々の感覚言語は私的な体験を指示するものではなく、私的体験のための新しい言語として私的言語を開発するとある種の不合理に陥る、と示そうとウィトゲンシュタインが意図していたということは真剣なウィトゲンシュタインの読者の間では今日認められていることであると思われる。しかし私的言語が不可能であるとしても、私的体験が存在するか否か、という点に関しては一致が見られない。ウィトゲンシュタインはその存在を認めるとも認めないともつかない発言をしている（304 節など）からである。現に私的体験が存在するか否か、私的言語が可能であるか否かという問題に対して、（1）私的言語は不可能であり私的体験は存在しない（2）私的言語は不可能であるが私的体験は存在する（3）私的体験は存在し私的言語も可能である、という三つの可能な立場が『探究』の解釈と絡み合って、それぞれ展開してきた。

本稿の基本的な立場は先の三つのうち第一のものの擁護を試みるものである。しかしその際に『探究』の順に従って解釈して行く道をとらず、私的言語論の諸節を私的体験が存在するかという問いを巡って再構成する。そうすることによって私的言語論やウィトゲンシュタインのカブトムシと呼ばれる議論の治療的性格に新たな光を当てる。最終的には私的体験が存在するか否かという問いはパラドクスに至るが、それは存在するか否かという問いがナンセンスであることを見て取ることによってのみ治療されるのである。

1 章では『探究』の「痛み」概念を考察するための予備的考察をする。1.1 では「痛み *Schmerz*」という語が『探究』のどの節に出現するかを俯瞰し、本稿が注目する私的言語論とウィトゲンシュタインのカブトムシがどのような位置づけにあるかを確認する。『探究』の「痛み」概念の考察は、243 節から 411 節の間でなされるのであり、私的言語論とウィトゲンシュタインのカブトムシはその中心である。1.2 では『探究』の読みに近年の研究との関連から、私的言語論の理解においてナ

ンセンスの概念が極めて重要であることを論じる。それは対話的で治療的な『探究』の方法論と関わっている。

2 章では私的言語論の中心的な諸節の解釈を行う。2.1 では、体験の私秘性とそれを語るように思われる日常言語について扱う (243 節、244 節)。そこで示されることは、日常の感覚言語は私的体験を指示する語ではないということである。その際「痛み」などの日常の感覚言語の語は、人間の自然な表出に置き換えられているという、表出説という名前で知られる仮説が導入される。2.2 では、私的言語の問題へ入る前に、日常の言語が痛みに伴う私的感覚と関わっているという考え方を検討する。それはウィトゲンシュタインのカブトムシという呼び名で知られる 293 節の議論である。293 節は、「痛み」に代表される感覚を語る我々の感覚語の本質の知識を我々は自分の場合のみから知るという素朴な考えが、言語を用いたゲームの中では私的体験が何ら本質的役割を果たさないという理由で退けられることを示している。従って私的体験は日常の言語では何の役割も果たさないことが明らかになった。2.3 では、2.2 を受けて、日常の言語が私的感覚と関わらないならば、私的感覚を意味する私的言語を構築することは可能かという問題へ移る。その言語の話者は、いかなる自然な表出とも結びつかない感覚を直示的定義によって「E」という記号で示そうとする。これが有名な感覚日記であり、それに対して 261 節では公的な言語の語がその定義の際に役立たないという批判が与えられる。そこで示されるのは私的言語は例え可能であるとしても、それは極めて奇妙なものであることである。すなわち、それは「可能である」とも「不可能である」とも言いえないようなものである。これを本稿は端的にナンセンスであると結論する。2.4 では、それでも私的体験は存在する、という「病人」の見解を取り扱う。それは次のようなパラドクスを導く。「痛み」の言語ゲームを複数人で行われるものであると考えると、そのゲームにおいて他人には決して知りえない対象としての体験が無関係なものとして抜け落ちる (293 節)。一方で痛みを伴った振る舞いと痛みを伴わない振る舞いを我々は区別するが、その根拠として振る舞いの背後に何らかの私的体験が存在することを想定する。(304 節)。痛みが存在するとも存在しないとも言われるこのパラドクスは、それが存在を表記しているという考えを放棄することによってのみ、解消される。2.5 は、「病人」の見解の起源が「私の体験こそが現実を構成する最も重要な要素である」という見解にあることを、ウィトゲンシュタインの思考の発展史を概

略的に追いながら指摘する。そこで示されるのは『論考』『青色本』『「個人的経験」および「感覚与件」について』といったテキストでウィトゲンシュタインがそうした見解への抗しがたい誘惑を持っていたことである。そうしたものの見方に対する治療法は、我々が様々な場合に応じて言語ゲームを営むことができること、現に営んでいることを見て取ることにあとと指摘する。

『探究』の243節以下の私的言語論において、語「痛み」の使用は人間の自然な痛みの表出に支えられており、それと無関係に、私的体験に対応する言語を発明することによって私的体験を自己同一的な実体として取り出そうという試みは、私的言語がナンセンスであるという帰結によって失敗に終わった。我々は「これ以上言語をもって痛みの表現と痛みとの間に入り込むことなど望みえ」（『探究』245節）ないのである。それにもかかわらず私的体験は確かにある、と言いたくなることは一種の病気であり、その起源として「私の体験のみが現実である」という考えが、ウィトゲンシュタインの思考の発展史の中にあることが指摘された。しかし我々にとっての現実は実際に語を適用する諸場面にあるのであり、そこでは語ろうとしてもこぼれ落ちてしまう私的体験は問題にならず、問題になる場面でも必ず我々はそこからゲームを始めることができる。そのときもはや当初パラドクスに見えたものは存在しないのである。

（ながはし・ひかる 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学）